「うきま」「しっぴき」のことなど

高木福三郎

私が子供の頃、つまり五六十年前は、小桜町、大町、下田町、千束町、田中のあたりはみんな泥田かやわらでしたね。桜川の土堤は今よりずっと低くて貧弱なものだった。曲りくねっていましてね。ちょっと雨が降るとすぐ町中が水びたしになってしまう。秋になると「秋水」といって町の低い所は勿論のこと、四五年にいっぺん位は、本町の小網屋あたりから駅の前までは水につかって舟で渡り渡りしたもんです。家なんかほとんど無くて、今の駅前の繁華街はみんな芦の生えているやわらでした。

ところで桜川に沿った大町、小桜町あたりはずいぶん低いから、毎年水をかぶる。そこで百姓の人らは、何とかこの一帯を水の出ない田んぼにしようと苦労していたわけです。しかしなにしろ土地が低いんだから、水をかぶらないようにするためには土地を高くしなけりゃならない。そこで「うきま」という方法がとられたわけです。これはね「まこも引き」ともいいましたが、当時下田町あたりは、ひどく低い土地でどうしても田んぼは作れなかった。そしてそこいら一帯には、まこもや芦が一面に生えていて、それが毎年枯れて倒れて、層をなしていたんです。丁度二尺ぐらいの厚さにもなってね、それが水の上に浮いていたんですよ。それで人が乗ると、ぶわぶわしてね、時々足が抜けてダブーと腰のあたりまでむぐったりする。

そんな「うき間」のところに百姓達は舟にのって出かけていって「なーば」という一尺四方もあるでかい下駄をはいて、うきまにのっかるわけです。そして、柄の長さが二間位、刃渡りが二尺五寸もある鋭い鎌で、このうき間を四角く切るわけですよ。三人位でこの大鎌を持ってうきまの厚い層の中につっぷして、ごしごしとゆすぶりながら切るんです。力がいりますねこれは。そして三四十坪に四角く切り取って、竹をさして置いておくわけです。そして水がもっと出て、あたり一帯が水びたしになった頃、このうき間の上に板をひいて、いかだみたいにして、何人もがのっかって、竹のさおでこいで持って